

魯

迅

集

世界文学全集



魯
迅
集

世界文学全集 54



筑摩書房

世界文学全集 54 鲁迅集

昭和四十五年十一月一日発行

発行者 竹之内静雄

発行所 株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八
郵便番号一〇一―一九一
電話東京二九一―七六五一（代表）
振替東京四一二三

本文印刷 三晃印刷株式会社
製本 株式会社鈴木製本所

目次

呐喊

竹内 好訳

5

自序 狂人日記 孔乙己 藥 明日 小さな出来事 髪の話
風波 故郷 阿Q正伝 端午の節季 白光 兎と猫 あひる
の喜劇 宮芝居

彷徨

竹内 好訳

118

祝福 酒樓にて 幸福な家庭 石鹼 常夜灯 引き廻し 高
先生 孤独者 傷逝 兄弟 離婚

朝花夕拾

竹内 好訳

232

小引 犬・猫・鼠 阿長と『山海経』 二十四孝図 五猖会
無常 百草園から三味書屋へ 父の病氣 こまごました事
藤野先生 范愛農 後記

故事新編

竹内 好訳

297

序言 補天 奔月 理水 采薇 鑄劍 出関 非攻 起死

野草

竹内 好訳

383

題辭 秋夜 影の告別 乞食者 わが失恋 復讐 復讐(そ
の二) 希望 雪 風 うるわしい物語 過客 死火 犬の
反駁 失われたよい地獄 墓碑銘 顔れゆく線の顔え 立論
死後 このような戦士 賢人と馬鹿と奴隸 臘葉 色浅き血
痕の中に まどろみ

解説・年譜

竹内 好

416

魯
迅

訥^{とつ}喊^{かん}

(一九一八——二二年)

自 序

私も若いころは、たくさん夢を見たものである。後にはあらかた忘れてしまったが、自分では惜しいとは思わない。思い出というものは、人を楽しませるものであるが、時には人を寂しがらせないでもない。精神の糸に、過ぎ去った寂寞の時をつながせておいたとて、何になろう。私としてはむしろ、それが完全に忘れられないのが苦しいのである。その忘れられない一部分が、いまとなって『訥喊』となった、というわけである。

私は、かつて四年あまりの間、しょっちゅう——ほとんど毎日、質屋と薬屋に通った。年齢は忘れてしまったが、とにかく薬屋の帳場が私の背丈ほどあり、質屋のそれは背丈の倍ほどあった。私は、背丈の倍ほどある帳場の外から、着物や髪かざりなどをさし出し、さげすみの中で金を受け取り、それから背丈ほどの帳場へ行って、長わづらいの父のために薬を買った。家に帰れば帰るで、また仕事が山は

どあった。かかりつけの医者がごく有名な人だったので、その処方箋の薬引(補助薬)も変っていたからである。冬の蘆の根、三年霜にあたった甘蔗、元のつがいのままのコーロギ、実のなった平地木(小澤木一種)……手に入りがたい代物ばかりである。それほどにしても父は、病が日ましに重くなり、とうとう死んでしまった。

かなりの暮し向きから、急にどん底生活に陥った人があるとすれば、その人はきっとその過程で世間の人々のいろいろな姿を見るだろうと私は思う。私がNへ行ってK学堂にはいろいろと決心したのも、異なる道を行き、異なる土地へ逃れて、別種の人々と交わりたいと考えたかららしい。母は、しょうことなしに、八円の旅費を工面してくれて、私の好きなようにせよと言った。だが母は、泣いた。これは人情として、当然であった。なぜなら、そのころは経書を学んで官吏の試験を受けるのが、正当なコースであり、洋学を勉強するのは、世間の目からすると、行き場所のなくなった人間がついに魂を毛唐に売り渡したものと見られていて、それだけよいにはずかしめられ、いやしめられるからであり、のみならず、母は、自分の息子に会えなくなるからであった。だが私は、そんなことに構っていられずに、とうとうNへ行ってK学堂に入学した。この学校で私ははじめて、世には物理や、数学や、地理や、歴史や、図画や、体操などの学問があることを知った。生理学は習わなかったが、私たちは木版本の『全体新論』や『化学衛

生論』などを目にする事ができた。私はいまでも覚えて
いる。以前の医者の理屈や処方、いま知ったこととくら
べてみて、しだいに私は、漢方医は結局意識的あるいは無
意識的な騙りに過ぎない、ということをとるようになった
のである。そして同時に、騙られた病人と、その家族に
たいして深い同情を抱くようになった。さらにまた、翻訳
された歴史書によって、日本の維新が大半、西洋医学に端
を発しているという事実をも知ることになったのである。

これらの幼稚な知識のお蔭で、のちに私の学籍は、日本
のある田舎町の医学専門学校に置かれることになった。私
の夢はゆたかであった。卒業して国に帰ったら、私の父の
ように誤られてゐる病人の苦しみを救ってやろう。戦争の
ときは軍医を志願しよう。そしてかたわら、国民の維新へ
の信仰を促進させよう。そう私は考えていた。私は、微生
物学を教える方法がいまどんなに進歩したか、知るべくも
ないが、ともかくそのころは、幻灯をつかつて、微生物の
形態を映してみせた。そこで、講義が一くぎりしてまだ時
間にならないときなどには、教師は風景やニュースの画片
を映して学生に見せ、それで余った時間をうめることもあ
った。時あたかも日露戦争の際なので、当然、戦争に關す
る画片が比較的多かった。私はこの教室の中で、いつも同
級生たちの拍手と喝采とに調子を合わせなければならな
かった。あるとき、私は突然画面の中で、多くの中国人と絶
えて久しい面会をした。一人がまん中にしばらくられており、

そのまわりにおおぜい立っている。どれも屈強な体格だが、
表情は薄ぼんやりしている。説明によれば、しばらくして
いるのはロシア軍のスパイを働いたやつで、見せしめのため
に日本軍の手で首を切られようとしているところであり、
取りかこんでいるのは、その見せしめのお祭りさわぎを見
物に來た連中とのことであつた。

この学年がおわらぬうちに、私は東京へ出てしまつた。

あのことがあつて以来、私は、医学など少しも大切なこと
でない、と考えるようになった。愚弱な国民は、たとい身
体がどんなに健全で、どんなに長生きしようとも、せいぜ
い無意味な見せしめの材料と、その見物人になるだけでは
ないか。病氣したり死んだりする人間がたとい多からうと、
そんなことは不幸とまではいえぬのだ。されば、われわれ
の最初になすべき任務は、彼らの精神を改造するにある。
そして、精神の改造に役立つものといへば、当時の私の考
えでは、むしろ文芸が第一だつた。そこで文芸運動を提唱
する氣になつた。東京にいる留学生仲間では、法政や、理
化や、さらに警察や、工業を學ぶ連中は多かつたが、文学
や美術を修めるものはいなかつた。それでもどうやら、冷
淡な空氣のなかで、数人の同志を見つけることはできた。
そのほかになお、必要な数人をかり集めて、相談した結果
が、ともかく雑誌を出そうということになつた。雑誌の題
名は「新しい生命」という意味を取ることになり、私たち
はそのころ、多く復古的な傾向があつたところから、これ

をつめて単に「新生」と称することにした。

『新生』の出版の期日がせまった。が、まず最初に、原稿を引き受けていた数人が姿をくらました。つづいて、さらに資本が逃げてしまった。あとには一文なしの三人だけが残された。はじめるときから時勢にそぐぬ計画だったので、失敗したとて今さら何も言うべきことはない。しかもその後は、この三人さえ、それぞれの運命に駆り立てられて、いっしょに集まって未来のよき夢を語りあうこともできなくなった。これが、われわれの生まれざりし『新生』の顛末である。

私が、これまで経験したことのない味気なさを感じるようになったのは、それ以後のことである。はじめ私は、なぜそうであるかがわからなかった。後になって考えたことは、すべて人の主張は、賛成されれば前進をうながすし、反対されれば奮闘をうながすのである。ところが、見知らぬ人々の間で叫んで相手にいっこう反応がない場合、賛成でもなければ反対でもない場合、あたかも涯しれぬ荒野に身をおいたように、手をどうしていいのかわからぬのである。これはなんと悲しいことであらう。そこで私は、自分の感じたものを寂寞と名づけた。

この寂寞は、さらに一日一日成長していつて、大きな毒蛇のように、私の魂にまつわって離れなかった。

しかし私は、自分に理由のわからぬ悲しみを抱いていたとはいえ、憤る気持はいささかもなかった。なぜなら、こ

の経験が私を反省させ、自分を見つめさせたからである。つまり私が、臂を振って一呼すれば応ずるもの雲のごとしといった英雄ではないということである。

ただ自分自身の寂寞だけは、除かないわけにはいかなかった。それは私にとってあまりにも苦痛であったから。そこで私は、種々の方法によって、自分の魂を麻醉させ、自分を国民の中に沈め、自分を古代に返らせようとした。その後も、もっと大きな寂寞、もっと大きな悲しみを、いくつも直接体験したり、傍から眺めたりした。すべて私にとって、思い出すに堪えない、それらを私の脳といっしょに泥土の中に沈めてしまいたいことばかりである。が、私の麻醉法はきき目があつたらしく、青年時代の慷慨悲憤の気持はもう起らなくなった。

S 会館(会館は同郷人の宅)

かし、庭の槐(えい)の木で女が首をつつたと言ひ伝えられていた。いまでは槐の木は、もう登れぬくらい高くなっているが、その部屋にはまだ住み手はなかった。何年も何年も、私はその部屋を寝ぐらにして、古い碑文を写していた。仮りのすみ家に訪れる客はなし、古碑の中では問題にも主義にもぶつからずにすんだ。しかも私の生命は、このまま暗々のうちに消えてゆくのである。これぞ私の唯一の願いでもあった。夏の夜は、蚊が多い。棕櫚(いちょう)のウチワを使いながら、槐の木の下に坐つて、生い茂った葉の隙間越しにチラチラ

見える青空を眺めていると、おそ出の青虫がよくひやりと首筋に落ちてくることがあった。

そのころ、時たま話しにやってくるのは、古い友人の金心異であつた。手にさげている大型のカバンをぼろ机の上にほうり出し、長衣を脱いで、向いあつて坐る。大ざらいだから、まだ心臓をドキドキさせているらしい。

「君はこんなものを写して、なんの役に立つのかね？」ある夜、彼は私のやっている古碑の写本をめくりながら、研究めいた質問を出してきた。

「なんの役にも立たんさ」

「じゃ、君はなんのつもりで写すんだ？」

「なんのつもりもない」

「どうだい、君は何か文章でも書いて……」

私には、彼の言う意味がわかつた。彼らは『新青年』という雑誌を出している。ところが、そのころはまだ誰も賛成してくれないし、といって反対するものもないようであつた。彼らは寂寞におちいったのではないか、と私は思つた。だが、言つてやつた。

「かりにだね、鉄の部屋があるとするよ。窓は一つもないし、こわすことも絶対にできんだ。なかには熟睡している人間がおおぜいいる。まもなく窒息して、みんな死んでしまふだろう。だが、昏睡状態からそのまま死へ移行するのだから、死ぬ前の悲しみは感じないんだ。いま君が、大声を出して、やや意識のはっきりしている数人のものを起

こしたとすると、この不幸な少数のものに、どうせ助かりっこない臨終の苦しみを与えることになるが、それでも君は彼らに済まぬと思わぬかね」

「しかし、数人が起きたとすれば、その鉄の部屋をこわす希望が、絶対にないとは言えんじゃないか」

そうだ。私はむろん、私なりの確信はもっているが、し

かし希望ということになれば、これは抹殺はできない。なぜなら、希望は将来にあるものであるから、絶対にないという私の証明をもつてして、有りうるという彼の説を論破することは不可能だからだ。そこで結局、私は文章を書くことを承諾した。これがすなわち、最初の「狂人日記」という一篇である。その後は、踏み出した以上はもどるわけにいかず、友人たちの依頼があるたびに小説めいた文章を書いて、お茶をにごして来たのが、積み積つて十数篇になつた。

思うに私自身は、今ではもう、せつなさが突きあげてきて声になるといった人間ではなくなっている。だが、あのころの自分の寂寞の悲しみが忘れられないせいでもあろうか、時として思わず呐喊が口から出ることがあるが、せめてそれによつて、寂寞のただ中を突進する猛士に、彼が安心して先頭をかけられるよう、慰めの幾分でも与えられたらと思う。私の呐喊の声が、勇ましいか悲しいか、憎々しいかおかしいか、そんなことは顧みるいとまはないのだ。ただ、呐喊であるからは、主将の命令はきかないわけにい

かなかった。そこで私は、往々にして勝手な曲筆を弄し、「菜」の瑜兒（よじ）の墓にはいわれのない花輪を添えたし、「明日」でも、単四（しよ）婢子（ひし）がついに息子に会う夢を見なかった、とは書かなかったのである。これは当時の主将が、消極をきらったためであるが、また私自身としても、それで自分が苦しんできた寂寞を、私の若いころとおなじように甘い夢を見ている青年に伝染させたくなかったのである。

こうして見ると、私の小説が芸術からはるかに遠いことは、申すまでもないことである。しかるに今日、依然として小説の称を受けているばかりでなく、一本にまとめる機会さえ与えられるに至っては、何はともあれまことに僥倖（やうこう）といわざるをえない。僥倖の点では、私は心もとなさを感じはするが、またひるがえって、しばらくなりとこの世に読者がつづくことを思えば、さすがに嬉しくないことはない。

されば私は、ここに自分の短篇小説を集めて印刷に付し、ついでには以上に述べた因縁によって、これを『呐喊』と名づけたのである。

一九三二年十二月三日、北京において

魯迅するす

狂人日記

某といえるもの兄弟、いまその名を秘すも、みな余が住時、中学校にありし時代の良友なり。隔て住むこと多年、音信ようやく稀なりし。さきごろ、たまたまその一人の大病せし由をきく。あたかも故郷に帰るに際し、道を迂回して訪れつるに、一人にのみ会えりしが、病みしは弟なりという。遠路の見舞いかたじけなし、されど当人は病すでにいえて、某地に候補となりて赴任せり、かく言ひもて大いに笑い、日記帳二冊を取り出して余に示して曰く、これを見たまえ、当時の病状を知りたまわん、旧友に献ずるは差支えなし、と。持ち帰りて一読するに、けだしその病の「被害妄想狂」の類なりしことを知る。語るところきわめて錯雑し、順序次第なく、荒唐の言また多し。月日は記されど、墨色と字体の一樣ならざるにより、その一時に成りしにあらざるや必せり。間にやや脈絡を具うる箇所ありいまこれを抜萃して一篇となし、医家の研究材料に供せんとす。日記中に語の誤りあれど、一字も訂正せず。ただ人名のみは、すべて村人にして世の有名な人ならず、憚るところなしといえども、すべてこれを改めたり。さらに書名は、もと本人の全快後に題せしものなれば、あえて改むること

なし。民国七年四月二日しるす。

一

今夜は、月がいい。

おれはあれを見なくなつてから、三十年以上たつ。今日は見たから、気分がじつにいい。してみると、これまでの三十年以上は、まったく正気でなかったわけだ。だが十分用心しなきゃならん。でないと、あの趙家の犬がなぜおれをじろじろ見るのか。

おれはダテにこわがつてるんじゃないぞ。

二

今日はまるきり月がない。おれはまずいと思った。朝、用心して家を出ると、趙貴翁の目つきがおかしい。おれをこわがつているようでもあるし、おれを無きものにしようと思つているようでもある。ほかに七、八人、ひそひそ耳打ちして、おれの悪口をいつているやつがある。そのくせ、おれに見られるのがこわいのだ。往来であつたやつが、みんなそうだ。なかでもいちばん人相の悪いのが、大口をあけて、おれを見て笑いやがつた。おれは頭のとっぺんから脚の先まで、ゾッとなった。やつら、すっかり手筈をととのえたな、と思つた。

しかし、おれはこわくなかつた。平気で歩いていった。向うの方に子どもがかたまつていて、これもおれの悪口を

いつていた。目つきは趙貴翁とおなじだし、顔色もどす黒い。おれは、子どもたちがなんのうらみがあつて、子どもたちまでこんなマネをするのかと思つたら、我慢できなくなつて「言つてみる！」つてどなつてやつた。そしたら逃げて行つてしまつた。

おれは考へた。趙貴翁はおれになんのうらみがあるのか。通行人はおれになんのうらみがあるのか。あるといへば二十年前に、古久先生の古い大福帳を踏んづけて、古久先生にいやな顔をされたことがあるだけじゃないか。趙貴翁は古久先生の友人ではないが、きつとその噂をきいて、おれのことを憤慨しているんだろう。そして通行人をそのかして、おれを憎むように仕向けているんだろう。ところで、子どもはどうだ。あのころ生れてもないじゃないか。そのくせ、なぜ今日は、おれをこわがつているような、おれを無きものにしようと思つてゐるような、へんな目つきでおれをにらむんだ。こればかりは、おそろしいことだ。不思議なことだし、悲しいことだ。

そうだ、わかつた。おやじや、おふくろたちが教えたんだ。

三

夜、どうしても睡れない。物事はすべて、研究してみないとわからんものだ。

やつら——その中には、県知事に枷をはめられたやつも

いる。ボスにひっぱたかれたやつもいる。役人に細君を寝取られたやつもいる。おやじやおふくろを借金取りにいじめ殺されたやつもいる。しかし、そのときのやつらの顔つきだって、昨日のようにおそろしくはなかったし、ものすごくはなかった。

なかでも不思議なのは、昨日往来であったあの女だ。自分の息子をなぐりながら「畜生、おやじめ！ あたしや、おまえさんに食らいついてやらなきや腹の虫がおさまらない」と言っているのだ。そのくせ、目はおれの方を向いている。おれはドキッとなって、うろたえてしまった。そうすると、あの青い顔の、歯をむき出したやつらどもが、ドッと笑うのだ。陳老五が、いそいでやってきて、無理やりおれを引きずって家へ連れて帰ったわけ。

引きずって家へ帰った。家のものはみな、よそよそしいふうをしてやがる。やつらの目つきは、ほかの連中とおなじなんだ。書斎へはいったら、外から鍵をかけやがった。まるで鶏かあひるでも追い込んだみたいさ。この一件で、おれはますますやつらのカラクリがわからなくなった。

二、三日前、狼子村^{ヲウコウラ}から小作人が来て、不作をこぼして、兄貴に話していたわけ。やつらの村に大悪人がいて、みんなに殴り殺されたが、そいつの内臓をえぐり出して、油でいためて食ったやつがあるそうで、そうすると肝玉が太くなるという話だ。おれがちょっと脇から口をいれたら、小作人と兄貴とが、じろじろおれの方を見たわけ。今日や

つとわかった。やつらの目つきは、町にいた連中の目つきにそっくりそのままじゃないか。

思い出しただけで、おれは頭のとっぺんから脚の先まで、ゾツとなる。

やつらは人間を食いやがる。してみると、おれを食わないという道理はない。

そうだ、あの女が「おまえさんに食らいついてやる」と言ったのと、あの顔の青い、歯をむき出した連中が笑ったのと、こないだあの小作人がしゃべったこととは、てっきり暗号なのだ。そうだ、わかった。やつらの言うことはみんな毒だ。笑いの中には刀がある。やつらの歯はみんな白くてピカピカだ。あれは人間を食う道具なのだ。

おれは自分では悪人でないつもりだったが、古の家の大福帳を踏んづけて以来、少しあやしくなった。やつらは何か考えているらしいが、おれには見当がつかぬ。まして、やつらは仲たがいすると、すぐ人を悪人よばわりするのだ。おれは今でもまだおぼえている。兄貴がおれに論文の書き方を習わせたとき、どんな善人でも少しけなしてやると、マルをたくさんくれたわけ。悪人を弁護してやると「奇想天外」だとか「独創的」だといってほめてくれたわけ。やつらが何を考えているのか、おれに見当のつくはずはない。まして、食おうと思っっている際なんだから。

物事はすべて、研究してみないことにはわからない。むかしから絶えず、人間を食ったとおれは覚えているが、あ

まりはつきりしない。おれは歴史をひっくり返してしらべてみた。この歴史には年代がなくて、どのページにも「仁義道德」などの字がくねくね書いてある。おれは、どうせ睡れないから、夜半までかかって丹念にしらべた。そうすると字と字の間からやっとな字が出てきた。本には一面に「食人」の二字が書いてあった。

本にはこんなにたくさん書いてある。小作人はあんなにたくさんしゃべった。そのくせ、ニヤニヤ笑いながら、へんな目でおれをにらみつけやがる。

おれだって人間だ。やつらは、おれが食いたくなっただ。

四

朝、しばらく静坐した。陳老五が飯を運んできた。野菜が一皿、魚の蒸したのが一皿。その魚の目は、白くてコチコチで、パツクリ口をあけているところは、あの人間を食いたがっている人間どもとおなじだ。少し箸をつけてみたが、ヌルヌルしていて、魚だか人間だかわかりやしない。腹の中のものを洗いざらい吐き出してしまった。

「老五、兄貴に言ってくれ、おれは退屈でたまらんから、庭を散歩したい」と言うと、老五のやつ、返事もしないで行ってしまった。だが間もなくやって来て、戸をあけてくれた。

おれは動かなかった。やつらがおれをどう処置するか、

見ていてやるうと思った。どうせ、おれを釈放する気のな
いことはわかつている。やっぱりその通りだった。兄貴が
一人の老人を案内して、のろのろはいって来た。不気味な
目つきをしたやつだ。その目つきをおれに気取られまいと
して、下ばかり向いてやがる。そして眼鏡のふちから、チ
ラチラおれの様子をうかがう。兄貴が「今日はいよいよ調子
がいいようだね」というから「ええ」と答えた。兄貴が
「今日は何先生に診察してもらうことにしたよ」というか
ら「そうですか」といってやったが、この老人が首斬り人
の化けたのだくらいは百も承知の上だ。脈を見るという口
実で肉づきの加減を見るにきまっている。その功によって
自分も肉の一切れも分けてもらうつもりだろう。おれは、
こわくなんかない。人間こそ食わないが、肝はやつらより
太いんだ。拳骨を二つ突き出して、やつが何をするか見て
いた。やつは腰かけて、目をつむって、長いことモソモソ
やって、長いことポカンとしていた。それから例の不気味
な目をあけて「くよくよせんでな。静かに養生すればすぐ
によくくなります」と言った。

くよくよせんで、静かに養生しろ！ 養生して肥えれば、
むろん、やつらはそれだけよい食えるわけだ。だが、お
れになんのよいことがあるか。何が「くよくよします」だ。
やつら一味は、人間を食いたがっているくせに、変にビク
ビクして、体裁ばかり気にして、思いきって手をくだすこ
とができないのは、笑止千万な話だ。おれはこらえきれな

くなくて、大声で笑ってやったら、すっかりいい気持ちになった。この笑いには勇氣と正氣がみちあふれているのが、自分でもわかった。老人と兄貴とは、顔色を変えて、おれの勇氣と正氣とに圧倒されてしまった。

だが、おれに勇氣があればこそ、やつらはいっそうおれを食いたがる。その勇氣にあやかりたいのだ。老人は部屋を出ていってまもなく、小声で兄貴にささやいた。「さつさと食うんですな」兄貴はうなずいた。そうか、兄貴もかとおれは思った。この大発見は、意外のようであつて、じつは意外ではなかつた。グルになつておれを食おうとする人間が、おれの兄貴なのだ。

人間を食うのがおれの兄貴だ。
おれは人間を食う人間の弟だ。

おれ自身が食われてしまつても、依然としておれは人間を食う人間の弟だ。

五

この二、三日は、一歩退いて考えてみた。かりにあの老人が、首斬り人の化けたのではなくて、正銘の医者だとしても、人間を食う人間であることに変りはない。やつらの祖師の李時珍（りときちん）のつくつた『本草（ほんそう）なんか』という本には、人肉は煮て食えとハッキリ書いてあるじゃないか。これでもやつは、私は人間を食いませんと言えるか。

うちの兄貴だつてそうだ。レッキとした証拠がある。お

れに本を教えてくれたとき、たしか「子を易（やす）えて食う」とはありうることで自分の口から言つたはずだ。それからまた、何だつたかである悪人を論じたとき、そいつは殺すばかりでなく「肉を食らい、皮に寝ね」て然るべきだと言つたことがある。そのころ、おれはまだ小さかつたので、心臓がいつまでもドキドキしていた。こないだだつて、狼子村の小作人が来て、肝を食つた話をしたとき、兄貴は眉ひとつ動かさず、しきりにうなずいていた。これで見つて、昔とおなじように心が残忍なことがわかる。「子を易えて食う」ことがありうるとしたら、なんだつて易えられるはずだ。誰だつて食えるはずだ。おれはむかしは、兄貴のお説教をただぼんやり聴き流していただけだつたが、今にして思うと、やつがお説教するときには、きつと口のはたに人間の油をなすりつけていたばかりでなく、心には人間を食いたい欲望がいつぱいつまっていたにちがいない。

六

まっ暗だ。昼間だか夜だかわからない。趙家の犬がまたはえだした。

獅子のような邪心、兎の臆病、狐の狡猾……

七

おれはわかつた。やつらの手口はこうだ。パッサリやつてしまふのは、やりたくないし、またやれないのだ。タタ

リがこわいからだ。そこでみんなで連絡をとって、網をはりめぐらせておいて、否でも応でもおれに自殺させるように仕向けているのだ。そうだ。こないだ町で見た男や女の様子からしたって、このごろの兄貴の挙動からしたって、八、九分通りそれにまちがいない。おれが自分で腰帶をといて、梁にかけて、自分でぶら下って死んでしまえというんだらう。やつらは殺人の罪名を着ないで、しかも念願がかなうという寸法だ。飛び上って喜んで、ウーウー悲鳴をあげて笑うだらうな。そうでないとしたら、もだえ苦しんで、もだえ死んでしまうかだ。これだと肉はおちるが、まあまあ御満足というところだらう。

やつらは、死肉しか食えないのだ——そうだ、何かの本でよんだことがある。「ハイエナ」とかいふ動物がいるそうだ。目つきも、からだつきも、醜惡な動物だ。いつも死肉を食っていて、どんな太い骨でも、バリバリ噛んでのみこんでしまうそうだ。考えただけでもおそろしい。「ハイエナ」は狼の親類で、狼は犬の本家だ。こないだ趙家の犬が、じろじろおれを見ていたのは、やつも一味で、連絡がついていたとみえる。老人は目を伏せて、下ばかり向いていたが、そんなことでおれがだませるものか。

いちばん気の毒なのは、兄貴さ。やつだつて人間だ。どうしてこわがらないのだ。おまけに、グルになっておれを食うなんて。慣れっこになってしまつて、悪いと思わないのだらうか。それとも良心を失つてしまつて、知りつつや

るのだらうか。

おれは、人間を食う人間を呪うのに、まず兄貴から呪いはじめよう。人間を食う人間を改心させるのに、まず兄貴から改心させよう。

へ

しかし、こんな理屈は、もう今では、やつらにわかつていていいはずなんだが……

突然、一人の男がやって来た。年はせいぜい二十歳前後、顔かたちははつきりしない。ニコニコしながら、おれに向つて会釈した。だがその笑いも、どうもほんとうの笑いではなかった。おれは尋ねてやつた。「人間を食うことは、正しいか？」その男は、相変らずニコニコしながら答えた。「飢饉でもないのに、人間を食つたりするものか。」おれはすぐにさとつた。こいつも一味で、人間を食いたがつてゐるんだ。そこで勇氣百倍、あくまで問いつめてやつた。

「正しいか」

「そんなことをきいて、どうするんです？ あなたは、まったく……冗談がうまい……今日はいいい天気ですね」

いい天気だった。月もあかるい。だが、おれはおまえにきいているのだ。「正しいか？」

彼はそうだとは言わなかった。あいまいな口調で「いや……」と言つた。

「正しくない？ じゃ、やつらはなぜ食うんだ」